

▶ 第3章

北朝鮮リスクと東アジアの安全保障

日本総合研究所国際戦略研究所 特別顧問 (前理事長・元外務審議官)

田中 均

【ポイント】

- 北朝鮮の核開発問題の解決が難しい理由として、歴史の中で周辺国からの圧力を受け続けてきた北朝鮮の猜疑心が極めて強いことと、米国の歴代政権の対北朝鮮政策が一貫性を欠いていたことなどがある。
- 関係国が北朝鮮の核廃棄が共通利益であることを確認し、再び6者協議に戻る必要がある。北朝鮮が核を持ったまま国際社会からの支援を受けずに国を維持できるとは思えない。長いプロセスの中で、北朝鮮が核兵器の保有をあきらめることを期待するというのがおそらく唯一の解決策だ。
- 東アジアをめぐる情勢が大きく変わりつつある中、北朝鮮の核廃絶を可能にするための必須の条件は米中の協力だ。米朝の間を取り持つ日本の役割も大きい。日本は朝鮮半島の平和と安定に当事者としてかかわっていく責務がある。

1. 北朝鮮の猜疑心と米政策の一貫性のなさ

2022年は小泉純一郎首相の訪朝・日朝平壤宣言から20年になる。今日はなぜ北朝鮮問題がかくも長く動かないのかについて私の考えをお話したい。

その最大の理由の1つは、北朝鮮特有の外の世界に対する猜疑心だ。北朝鮮は歴史の中で周辺国から圧力を受け続けてきた。それにどう抗していかを常に考えてきた国だ。また北朝鮮はキム・ファミリーの政権が続いている。それによって猜疑心が積み重なり強められている。そうした見方から、自分たちが自立した国であるためには何をなすべきか、を考えているのだと思う。

北朝鮮の核問題が国際問題となったのは1990年代の初めだ。第1次核危機があって米朝間でいわゆる枠組み合意ができた。その後、30年の間に、枠組み合意が一定期間守られ、平壤宣言があり、南北の非核化宣言がなされた。(南北朝鮮と米中日口の)6者協議の合意もあった。しかし、北朝鮮が06年に核実験を始め、今年はずでに50発以上弾道ミサイルをテストと称して撃つという事態に至っている。北朝鮮の指導者は基本的に外からの動きに対し、自分たちが自立していることを、言葉ではなく実力でそれを示す。それが核実験

であり、ミサイルの発射だと思う。

なぜ、北朝鮮は国際社会からあれだけの制裁を受けながら、米国の攻撃を受けないための安全弁として核を持つという位置づけなのだろう。経済力では、もはや韓国と競争できない。唯一核兵器を持つことで韓国に対し、政治、安全保障面で優位を保つことができる。核を持つことは、中国やロシアに対しても一定の独立性を担保するという意味で重要なのだと思う。彼らは、核だけ持って国際社会の支援なしに繁栄していけるとは思っていないと思う。しかし、果たしてどこに着地していくのかが一番大きな課題となる。

北朝鮮との交渉が進まない第2の理由は、西側社会、とくに米政権の政策が一貫していないことだと思う。これまで30年くらいの中に、北朝鮮の核の廃棄に向けて関係国が共通のアクションを取り得る時期があったと思う。しかし、民主主義社会は国内にいろいろな意見を抱えている。米国の場合、政権が最大8年、場合によっては4年で終わる。このため米国の対北朝鮮政策も一貫してこなかった。

クリントン政権でつくった枠組み合意は一定期間もったが、その後ブッシュ政権では枠組み合意を破棄するという意識が強かった。2001年の9.11の後、ネオコン政権は北朝鮮に非常に強い圧力をかけた。05年には韓国、中国、日本、ロシアを含めた6者協議で一定の合意ができた。しかしその後オバマ政権では結果をつくることはできず、そのまま何もしなければ北朝鮮は潰れるだろうという対応をとった。トランプ政権では首脳が表に出て一定の合意をつくったが、それは動かなかった。こうした一貫性のない対応が、北朝鮮のように極めて一貫した西側への政策を持つ国に対しては通じなかったと言える。

2. 北朝鮮の核廃棄は周辺国共通の利益

その上で、これから北朝鮮の問題に取り組む上で留意すべき点を考えたい。まず周辺諸国の間で北朝鮮の核兵器を廃棄させることに共通の利益はあるだろうかを議論したい。私は、共通利益は間違いなくあると思う。本音では、中国政府もロシア政府も、北朝鮮の核は自国の安全にとって有害だと思っている。

しかし、仮に周辺国の共通の利益ができたとしても、北朝鮮がここまで開発した核兵器やミサイルを廃棄するだろうか。北朝鮮は、たぶんパキスタンのような形でソフトランディングをねらっているのではないか。パキスタンはインドとの対立の中で核兵器を持った。これは核拡散防止条約（NPT）に反するとして日本を含む多くの国が制裁を行った。しかし、テロとの闘いという新たな地政学的要因が出て来て米政府の圧力で制裁が解除された。北朝鮮は、新たな地政学的な理由で国際社会が北の核を既成事実として受け止め、援助する可能性があると思っているのではないか。

私は北朝鮮が核を持ったまま国際社会からの支援を受けずに国を維持できるとは思え

ない。また、北朝鮮の核の保持には反対である。北朝鮮の核が正式に認知されると、核ドミノを生む。パキスタンの場合には、インドの核とのバランスを保つという一定の正当性があった。しかし北朝鮮はこれまで常識的な国際法に違反した極端な行動をとってきた。従って、北朝鮮の核保有を認めることにはならない。

3. 6者協議の再開と米中の協力

仮に北朝鮮と核廃棄へ向けての交渉を始めるとしても、当初は同床異夢にならざるを得ない。また、検証できる形での核廃棄は交渉に時間がかかる。その長いプロセスの中で、北朝鮮が核兵器の保有をあきらめることを期待するというのがおそらく唯一の解決策だ。

2005年9月の6者協議での合意は極めて包括的な合意だった。検証できる形で核の廃棄を目的としつつ、米朝関係の正常化、平壤宣言に基づく日朝関係の正常化、経済協力、信頼醸成、技術協力などを包括的かつ同時並行的に進めていくことになっていた。それしか北朝鮮問題を解決する道はない。つまり6者協議に戻ることだ。それまでに米朝政府間で相当長い協議が必要になる。

今日、東アジアをめぐる情勢が大きく変わりつつある。その中で、北朝鮮の核廃絶を可能にするための必須の条件は米中の協力だ。05年に6者協議で合意にこぎつけた時、中国は明らかに北朝鮮の核廃棄が国益にかなうと思っていた。その後の国連の制裁決議への参画も朝鮮半島の安定が国の安全保障につながると考えていたからだ。しかし今、中国共産党政権にとり最大の課題は米中関係だ。従って、朝鮮半島の問題も米中対立の枠組みの中で判断していくことになるだろう。ロシアにしても、ウクライナ侵略で国際社会と対立する中で、朝鮮半島問題をどうとらえるかという意識だろう。このように客観的な状況は良くない。しかし、北朝鮮が核開発を続け、ミサイルを撃ち続け、制裁を受け続けるということがどれだけ長く続くのか。私はそんなに長く続くとは思えない。北朝鮮はどこかで活路を見出すということになるのではないか。

4. 朝鮮半島問題をめぐる日本の役割と責務

その上で、日本の対北朝鮮政策について申し上げたい。ある時から、日本にとって北朝鮮問題はほぼ8割がた国内政治と表裏一体になった。拉致問題が与えた影響は大変に大きく、北朝鮮と対話するという柔らかな態度をとることは現実的ではなくなった。

一方で、日本の歴代首相は、無条件で北朝鮮と交渉する用意があるとおっしゃる。私は無条件で会うと発言することはリスクが大きいと思う。やはり事前の詰めた交渉が必要だ。北朝鮮は首脳の一存で何でも決まるというポーズを取り続けているが、実は事務方もかな

りしっかりしている。私の時は国防委員会で相当政策的議論をしていた。

それに加えて、北朝鮮との交渉で成功する秘訣は何よりもウソをつかないことだ。つまり信頼に基づいた交渉でなければならない。大国との交渉は打算とか計算づくで行われる。ところが北朝鮮の場合は、精神主義というか儒教の意識なのか、信頼、そして交渉相手を尊敬することが成功のための大きな要素だと理解する必要がある。

そのような観点からみると、私は米国と北朝鮮との交渉はミスマッチだと思う。米国の交渉相手に感じるのはその背景にある力だ。だから、力には力だと思ってきた国は、米国の力を見たとなん、力に屈するわけにはいかないという意識になる。だから、米朝の間を取り持つ日本の役割は大きいと思う。北朝鮮の人々は意外に日本を受け入れている。支配を受けた国としての反発もあるが、非常に強いリスペクトもある。

朝鮮半島の問題は、日本にとってヴァイタルな安全保障上の利益がある。かつて日本は朝鮮半島の権益をめぐる中国、ロシアと戦争をした。こうしたことから日本は、朝鮮半島の平和と安定に当事者としてかかわっていく責務があると思う。

(2022年12月13日、日本経済研究センター・ウェビナー)